

# 令和3年度第3回乳幼児教育保育推進体制の充実・活用強化に関する懇談会 議事要旨

## 1 開催日時

令和3年3月24日（木） 午前10時～午前11時30分

## 2 開催場所

広島市役所北庁舎6階 教育委員室

## 3 出席者等

### (1) 学識経験者・教育関係者・関係団体代表者（オンラインによる出席）

朝倉 淳【座長】（安田女子大学 教育学部 児童教育学科 教授）

徳永 隆治（安田女子大学 教育学部 児童教育学科 教授）

渡邊 英則（認定子ども園 ゆうゆうのもり幼保園 園長）

松尾 竜（広島市私立保育協会 理事長）〔欠席〕

米川 晃（広島市私立幼稚園協会 理事長）

安藤 康子（広島市保育園長会 代表）

坂本 玲子（広島市立幼稚園長会 会長）

尼子 博崇（広島市小学校長会 代表）

### (2) 事務局（広島市こども未来局・広島市教育委員会事務局）

保育企画課長、保育企画課調整担当課長、保育指導課保育園運営指導担当課長、  
教育企画課長、指導第一課長、特別支援教育課長、教育センターメンバー

## 4 議題（公開）

令和3年度の公開実践の成果と課題について

## 5 傍聴人の人数

なし

## 6 懇談会資料名

- ・ 令和3年度の公開実践の成果と課題について（資料1）
- ・ 公開実践の実施概要（資料2）
- ・ 令和3年度公開実践のアンケート結果等（資料3）

## 7 出席者の発言要旨

事務局の説明に対し、以下のような意見・質問等があった。

※1 ○は学識経験者・教育関係者・関係団体代表者、●は事務局職員の発言を表す。

※2 「乳幼児教育保育アドバイザー」は「アドバイザー」と表記している。

### ・ 令和3年度の公開実践の成果と課題について。

○ 公開実践の当日と事後にアンケート調査を実施されたことは、今後に向けた課題を見つける上で有効だったと考える。相互理解・交流等について当日と事後のアンケート結果に違いが出ていることについて、恒常的な交流の構築を課題として分析されているように、全体を通して考えると、各園が他園との交流を求めていることを感じる。本年度公開された保育を他園の保育者が日常的に確認することができる環境を整えていくとよい。それがあると、保

育を振り返りたい時に、確認することができる。例えば、映像や書類にまとめたもの等を作成し、日常的に閲覧できるウェブサイト等を設けるとよいのではないか。

公開実践に参加できなかった幼稚園教諭・保育士等にも情報共有できるように考えていいかないといけない。日常的に公開実践の内容を確認することができる環境があれば、もっと多くの人が保育の在り方について情報を共有することができるだろう。

- 12月の基町保育園の公開実践に参加し、実施園が様々な準備をしていると感じた。私立幼稚園協会の取組の一環として、毎年、各区1園で、今回の公開実践と同じように各園の保育を見学する公開保育を実施しているが、今回の公開実践に参加し、意見交流の進め方が大変勉強になった。グループワークでは、それぞれのグループで発言しやすいようにスケジュール感のある進め方が考えられていたことが大変良いと感じた。

今年度は新型コロナウイルスの影響で参加者が絞られたが、今後は、管理職だけでなく、多くの幼稚園教諭・保育士等に参加してもらい、他園の公開実践を見てもらうことがよい。

- 2月の落合東幼稚園の公開実践に参加する予定だったが、新型コロナウイルスのため、中止になった。準備されていた当日資料を確認したところ、素晴らしい資料であり、実施園が実施したい保育内容を汲み取ることができた。当初、実施園が公開実践に対して、少しハーダルの高さを感じているのではないかと心配したが、無事に実施でき、安心した。報告資料を通して語り合いの大切さを感じ、来年度からの公開実践も大変楽しみとなった。

公立・私立、保育園・幼稚園の施設種別を超えて、他園の職員と子どもを中心に語り合っていくことが大切である。参加した荒神保育園においては、意見交流が盛り上がり、保育の中での子どもの言葉を取り上げ、どのように捉えたのか等、具体的な語り合いができた。こうした語り合いの風土の定着が、保育の質の向上に直結していくと感じる。現在、公立保育園では、地域を巻き込んだ公開保育を実施している。今年度については、新型コロナウイルスの影響で広く参加を呼び掛けることが難しかったが、今後、小規模保育事業所を含めた地域の施設に声を掛けて、巻き込んでいくことが必要だと感じた。

当日アンケートで高い割合だった“自園で活用したいこと”の選択肢が、事後アンケートでは“自園で活用した”割合が低くなっていることについては、参加した職員が自園で活用しようと考えても、施設長に理解してもらう難しさもあるためだと感じる。今後、参加者が自園に戻って、どのように活用していくのかが課題だと感じた。

- 10月にトップバッターとして公開実践を行った。普段の保育の公開ということであったが、この公開実践を機に、自園の保育の質の向上を図るために、指導案の作成に力を入れた。指導案を作るのは大変な作業だが、指導案を作成する過程で子どものことや日頃の保育を振り返り、考え方を整理することができた。作成した指導案については、参加者に保育の視点を持ってもらった上で公開実践に参加してもらうために、第2回懇談会での「指導案を事前に配り、保育の視点を共有した上で参加してもらった方が良い」という意見を踏まえ、事前に配付した。また、本市教育委員会の「園に行こう週間」という取組に合わせ、小学校にも呼び掛け、参加してもらった。

意見交流では、小学校視点での意見もあり、幼保小接続の推進につながり、意味があった

と感じる。保育の質の向上は、目に見えにくく、抽象的であるため、視点を具体化し、分かりやすくして公開実践を実施することができた。

公開実践の効果としては、参加した園の子どもたちと交流を深めることができた。あらかじめ日程を決めた行事としての交流ではなく、園の近くに来た際に立ち寄るなどの気軽な交流を日常的にできるようになった。職員同士では、参加園が公開実践の意見交流では聞けなかつたことを、後日、気軽に尋ねて来るなどの関係が構築できたことは、大きな成果だと感じる。意見交流では、他の園から「子どもの主体性を尊重した保育をしたい」、「環境づくりをしたい」という意見を聞き、どの園も向かっているところは同じだと感じた。アンケート結果で恒常に交流する関係を構築しなければならないという課題があるが、小さな交流を積み重ねていくことや公立園が地域の園を巻き込んでいくことが今後大切だと感じた。

- 実施園は準備が大変だったと思うが、基町保育園の公開実践に参加したところ、自然な形で保育が実施され、普段の保育を見学することができ、参加者は参考になったと思う。意見交流の進行も工夫され、継続的に公開実践を実施していくためには、限られた時間の中で内容を濃く、スムーズに進めていくことが大切だと感じた。成果として、具体的な場面から同じ視点で保育を捉えることができた、多様な意見に触れることができた、保育に対する考え方を広げることができた、という意見があり、良い取組だと感じた。今回の取組を通じて、園相互の理解が深まり、小学校も参加させてもらうことで幼保小接続の理解を深めることができた。幼稚園・保育園から小学校にスムーズに入学できるよう、互いを理解することだけに留まらず、今後、子どもにどういう配慮ができるか、保育所保育指針や幼稚園教育要領を互いに見直すことで、子どもたちが安心して進学できると感じる。

今後のポイントは恒常に交流できることである。参加者は、公開実践の良さを既に実感している。他の参加者を取り込んでいくためには、開催のハードルを下げる工夫と努力が必要である。ただし、参加者数には限りがあるので、この取組を広げていくためには、参加者以外の人どのように情報共有を進めていくのかについても考える必要がある。今後の取組を充実するには、参加者が趣旨、目的を理解し続けることが必要であり、それを理解せずに参加するだけとなると、形骸化し、せっかくの取組がもったいないことになる。何のために行うのか参加者が自覚した上で参加し、自園に戻って広げていくことで充実につながると考える。

- コロナ禍でありながら、公開実践を実施できたことには重要な意味がある。すぐの導入は難しいと思うが、コロナ禍であっても公開保育をオンラインで行い、保育園・幼稚園の先生が参加しやすくなっているやり方もある。公開実践をすることだけが目的になり、公立の幼稚園、保育園は公開実践の制度があるからしなければならない、指導案を作らなければならぬと取組のハードルだけを上げていくと公開実践は形骸化につながる。公開実践をしたくなるための仕掛けを設けてはどうか。園全体を公開するのではなく、保育を変えたい保育者をコーディネーターやアドバイザーがサポートし、その保育が変化していく姿を公開していくと面白い。先生が子どものことや環境のことを一生懸命に考えることは自身の保育の質を高めることにつながる。園の規模や園庭の有無などの条件は関係なく、自園でできる範囲の保育を考えることで、結果的に広島市の保育の質を上げることにもつながるだろう。そういう

った公開実践を行うためには、どのように園や保育者の保育を変えていくのか、コーディネーターーやアドバイザーが、子どもや保育者の声を聴きながら仕組みを考えていくことが必要であり、そのためには、コーディネーターーやアドバイザーの役割などを考えていく必要があるだろう。各園で公開実践を実施することは、どこでも行ける良さもあるが、大事なことは公開実践がしたくなることであり、自分の園の保育をもう一度見直しつつ、保育者としての学びや成長につながったことの成果を広げていくことが大事だと考える。

- 2月実施予定の落合東幼稚園の公開実践に参加予定であったが、参加できず、残念だった。アンケート結果については当日、事後のアンケートに分けて丁寧に分析をしており、次年度に向けて大きな示唆があると感じた。当日と事後のアンケート結果を比較して、他園との交流が増えたという回答が2割に留まっていることを課題として捉えていたが、自分は1ヶ月の間に2割の園で他園との交流が増えていることは、成果だと考える。また、当日のアンケート結果では、自園で活用したいとの選択肢の割合が高かったが、事後のアンケート結果では、自園で活用した選択肢の割合が低くなっていたことに関して、選択肢の中身も考慮する必要がある。例えば、行事の進め方の見直しは、1ヶ月の間ですぐには反映できない。他の数値も低下しているが、1ヶ月の短い期間で自園において活用することは難しいこともあるため、実態をうまく反映しているアンケート結果だと考える。全体的に見ても、肯定的な結果が多く、良かったと思う。
- ・ 「幼児教育推進体制の充実・活用強化事業」の区切りとして、当懇談会にこれまで参加されての御意見や御感想、今後の乳幼児教育保育支援センターの事業展開に向けての要望等について
- この懇談会は、委託事業の3年を合わせると6年となる。振り返ると、支援センターが立ち上がり、実践を深めていくための指導体制としてアドバイザーの体制ができ、本年度は公開実践を行い、大きな方向が見えてきた。乳幼児保育教育の質の向上に向けて取り組まれた成果が形になっている。  
その一つとして今年度行われた公開実践について、大きな成果を上げた中、来年度にどのようにつないでいかれるのかということが期待される。私が実際に公開実践を見た園では、見て欲しい所を示したうえで実践されたが、実際に子どもは生き生きと動いていた。指導案には先生と子どもの対応を見て欲しいと書いてあり、自然な形で子どもと先生が触れ合っていた。見るだけで「こういう対応が要るのだろう」「保育者にこういう気持ちがあるのだろう」ということを学ぶことができた。公開中に子どもが離壇から落ちるハプニングもあった。その子どもは泣くのかと思ったが、すぐに先生に抱きしめてもらい、その後、ニコニコしながら離壇に戻りみんなと同じように活動を始めた。ハプニング発生時の先生の対応が見事であった。また、子どもが園庭に出て色々な物を見つける遊びでは、先生が側にいた子どもに一言伝えると他の子どもも集まり、見様見真似で作業しながら大きなツリーを作っていく活動になっていた。先生がどのように対応するのか、先生がどのような気持ちで子どもを見ているのか、その保育の現場に触れると参観者は強く感化されるだろう。私の立場で言えば、幼稚園教諭や保育士を目指す学生に、そういう先生方の姿を見せたいと思った。そういう保

育者の思いや優れた保育の実際をどのように広げていくのかが支援センターにおいても今後の大変な課題と感じている。

○ 広島市の会議に参加させてもらい、横浜とは違う課題やよさが見えた。みんなで保育を話そうという場ができてきたことは良いことだ。

文部科学省の「幼保小架け橋プログラム」の委員をしている立場として言えば、幼児教育・保育の質を上げることは大切であるが、それを小学校にどのように理解してもらうのかということが、これからは大事になる。小学校以上の教育が本気で変わろうとしているのか、主体的・対話的で深い学びをどう実現していくのかという話は幼児教育がベースになる。

一人一人の子どもの話を聞くことや、子どもの声を聴きながら保育を組み立てる指導案やカリキュラムの在り方など、小学校のように教科書で教えるだけではなく、そこに子どもがいて、子どもとのやり取りの中で授業のやり方を変え、探究型の授業をすることをこれまで一生懸命に考えてきたのは幼児教育であり、一人一人の子どもの遊びを通して保育や環境を考えてきた。一人一人がどのような子どもたちなのか、どのような所で生き生きするのか、子どもの悪いところを見つけてそれを直すのではなく、それぞれの子どもの良さを認めつつ、その子の持っている力を伸ばしてきた。文部科学省の「個別最適な学び」とあるように、子どもが興味を持って学び、それが混ざり合う中で学びが深まり、協同的な学びになっていく。そういう学び方を中教審で示され、小学校以上でも取り組むとするならば、幼稚園・保育園・認定こども園が幼児教育・保育の質を上げよう、公開実践をしようということよりも、就学前の子どもの育ちを小学校で受け止め、1年生の授業をきっかけに、2～6年生の授業もどうしていくのかについて考えてほしい。

今、日本の教育のあり様を見直そうとする大きな流れの中で、広島市としてこのような流れを3年間で作った。それをやろうとする時には、地域も巻き込むけれど、小学校や保護者を巻き込み、子どもの育ちはどういうことなのか、一人一人の子どもが育つには、型にはめられるのではなく、それぞれが自己発揮しながら学び合うはどういうことなのか、そういう教育・保育の見直しは難しい話だと思うが、そこに足を踏み入れることが求められている。それを、広島市として、学校教育や乳幼児教育・保育に位置付けながら、広島の子どもが育っていくためにはどのようにするよいか、学校以上の教育の在り様の中でも、どのようにして子どもが育っていくのかを議論し、実践の中で話し合える場をつくる。皆さんのように議論できる人がここに集まっていることが大事だと思う。微力であるが応援できることはしていきたい。

○ どこの園もそうだと思うが、現在、事業計画の作成や今年度の見直しをする中で、色々な考えを巡らせている。この6年間の幼児教育の推進体制は非常に良かった。アドバイザーの制度ができたことや、乳幼児教育センターが県と市にできたことは大変嬉しい。これからどのように生かしていくのか、幼稚園・保育園等がどのように活用していくのかについて考えを巡らせなければならない。

アドバイザーの活用については、キャリアアップの制度が付加されていく際に、キャリアアップとアドバイザーの両輪を上手く使い、研修に生かすことについて考えている。昨年度から、園長は、働き方改革と研修の在り様に苦労している。保育をしなければならないし、

保護者支援もしなければならない。以前は午後からできていた研修も、預かり保育の人数が増え、職員の研修時間の確保が難しい。WEB研修であれば往復の時間は減るが、対面研修の方がクラッチ部分の話が沢山できる。アクセルとブレーキだけの研修よりも、クラッチの遊びの中での研修の方がよい。若い職員から、研修に行き、隣の人とつぶやきながら研修することが非常によかったと聞いている。アドバイザーに来てもらい、保育を見てもらって質を向上させていく研修を組み、キャリアアップにも活用できる。そういう仕組みを広島で模索をしてもらえるとよい。

悩んでいるのは、3つの資質・能力と幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿をどのように小学校に伝えるか、我々は遊びを通して子どもの育ちを育むが、学校は教科学習の中で子どもの成長がある。遊びと教科学習の相互のところで、「幼保小架け橋プログラム」が動くのだろうが、小学校のスタートカリキュラムの中で幼稚園の5歳児の保育をどう理解してもらえるのか。新たな1年を迎える中で色々と研鑽を深めてもらえるとありがたい。

- 自身はこの懇談会に3年次の1年間、広島市の保育園長会代表として参加した。広島市のことなどを皆さんと意見を交わすことができ感謝している。

公開実践については、公立保育園87園中9園が拠点園として公開実践を行っている。全園の園長や職員が公開実践の取り組みを理解し、自身がその園に異動し、実践する側になるかもしれないという思いを持つことや、拠点園の役割について関心を持つことができるよう、公開実践の報告等を公立保育園で情報共有している。広島市の公開が少しずつ広がり、語り合いの風土が少しずつ定着し、そのことについて懇談会の中で意見を交わすことができたことが大きかった。引き続き、保育の質の向上に向けて、公立保育園の園長、近隣園を巻き込みながら進めていきたい。今後、乳幼児教育保育支援センターの役割がどのようになるか関心を持っている。

- 3年間のうち2年間、広島市立幼稚園の代表として関わった。その中で、人材育成、幼保小連携、子育て支援など色々なテーマで皆さんと議論でき、勉強になった。現場では日々色々なことが起き、一つのテーマでもその年の課題が大きく違ってくるので、協議を行うことは引き続き必要である。保育園、幼稚園、小学校の先生、学識経験者の方の多彩な意見を聞き、意義深いものになった。

今後は、乳幼児教育保育支援センターがどのような役割を果たしていくのか、どのような施策を行うのかということが課題だと思う。ポイントとなるのは、アドバイザーの先生方が保育の質はどのようなことなのかについて、施設の形態を問わず園の実態に合わせて語り合える風土をつくることが必要である。形態も考え方も違う施設で、どこまで切り込むのかは難しいとは思うが、自園にアドバイザーを招き、話を聞いたり、話し合いをしたりした際に、アドバイザーは親身になって話を聞いてくれ、小さな悩み事も一緒に考える雰囲気を作ってもらえた。アドバイザーに相談してよかったです、来てもらってよかったですと思えるような運営がこれからも続いていくとよい。

同時に、アドバイザーが広島市の子どもをどのように育てたいのか、どのような子どもになつて欲しいのか、どのような大人になつて欲しいのか、ということについて、皆で語り合い、共通認識できると、そのことが各園の園内研修で徐々に広がっていくだろう。そして、

そのことが保育園、幼稚園、小学校だけではなく、公民館や子育てサークルなどの地域にも徐々に広がり、「広島っ子っていいよね」「広島で子育てするのはいいよね」ということが広がっていくとよい。

- 小学校の連携や接続ということもあり参加をさせてもらった。幼稚園・保育園で取り組んでいる主体性を大切にする、探究的な遊びや思考については、小学校でも取り組んでいる。御指摘いただいたように、このことを小学校でどのように考えているのかについては、文部科学省や先進校を手本に研究を進めている。しかし、一番学ぶべきことは幼稚園・保育園からではないかと思う。その子たちが就学するのであるから、そこを理解して初めて学びを継続していくことができると思う。そのような視点は、小学校にはまだまだ不足している。今後は、今の保育園・幼稚園で取り組んでいることを小学校が理解し、それをベースにして、どういった視点で小学校・中学校生活へ送り出していくのか、そのような考え方を広めて全ての教員が共有していかなければならないのではないか。今まででは、幼保小連携というと、個々の子どもの課題は共有していたが、もっと広く、教育観、子どもをどのように育てていくのか、そういったことを共有・連携していくという形になっていかなければならない。広島市の子どもたちをどのように育てるのか、小学校がスタートではなく、幼稚園や保育園がスタートであり、先を見れば高校までつなげ、一本の軸をしっかりと共有していく意識が大切である。

今後も公開実践を続けていくとよいが、これまで出された意見をもとに、継続、発展するといい。研修の継続の難しさは小学校でも感じる。形骸化し、趣旨が分からず形だけの参加となると、主体的な参加ではなくなる恐れがある。今後、しっかり継続していくための手立てが重要になる。

- 3年間、6年間の中で色々な体制が整い、パイプができ、実質的な取組が進み、それが子どもの育ち・学びにつながっていることは大変嬉しく思う。懇談会としても、色々な形で参画でき嬉しく思う。直近の3年間でいうと、3年前に世の中がどんどん動いている中で、どうするとよいのかということが根底にあった。3年を過ぎた今、その時には想像しなかったような状況も進んでいる。子どもの周りにデジタル化、A I化の波が押し寄せ、新型コロナでマスクを付けた生活が続き、テレビをつけると毎日、戦争の様子、破壊が映っている。そういう中で、子どもが何をどう感じ、どのように育っているのか、ということは大きな世界的な課題になっている。色々な体制が整ってきたので、そういう子どもの姿を捉えて、子どもがどのように育っているのか、そこに異変はないのか、大丈夫なのかということを捉えながら懇談会、センターでの取組を含めて、機敏に取組を動かしていく必要がある。子どもを取り巻く環境が大きく変わるもので、このような体制が出来上がり、その機能がより重要なになってきている。必ずしもこれまでの枠組みに捉われることなく、新しい姿、よりよい姿を求めて、私たちが子どもの未来を考えながら、取り組む時期になった。3年間の成果を今後も生かすことができればと考える。